第十六講　コミュニケーション論

　食をともにする、ということは人間にとって特別な意味を持っている。家族や職場の同僚との日々の食事、久しぶりに会う旧友との食事、仕事の相手先との契約がかかった大事な食事、生涯の伴侶（はんりょ）と出会う見合いの席の食事、旅先で招かれた思いがけない食事など、われわれは食事を通してさまざまな人々と対面し、時を共有する。食事は人々の出会いの時を演出し、親密な関係を確認させ、壊れかかった関係を修復し、新たな関係を作る大きな力を持っている。食事がなければ、人々はこんなにも頻繁（ひんぱん）に出会うことはないだろうし、向かい合って話をすることもないだろう。それはとても不思議なことだと私は思う。なぜなら、人間に近縁な霊長類は食をともにするということはめったにないし、これほど多様な仲間と顔を付き合わせることもないからだ。

　そもそも霊長類にとって食べるという行為は極めて個人的な営みだ。食物は争いのもとになりこそすれ、他者と分かち合ったりするものではない。単独で生活しているサルたちはそれぞれなわばりを構（かま）えているが、それは他者に邪魔されずに食物を独占できるようにするためだ。群れを作って暮らすサルたちは互いに優劣の順位を認知しているが、それは食物をとる優先権をあらかじめ決めてトラブルを起こさないようにしているからである。劣位な方が食物をとることを控えればけんかは起きないし、周囲がそのルールを守るように仕向ければトラブルは長引かない。食物は優劣の関係を反映させる源泉であり、サルたちは食物を前にして互いの差異を認知することによって共存している。

　そんな<u>物騒な代物</u>[A]をなぜ人間は親密な関係を作るために用いるようになったのだろう。その答えは類人猿の食物を分配する行為の中に隠されている。人間に最も近縁なゴリラとチンパンジーは、他者に乞（こ）われると採食場所や食物を譲ることがある。しかも、優位者ではなく劣位者が分配を要求することが多い。サルとは違って類人猿は、食物を前にして劣位者が優位者に抑制を強いることがあるのだ。しかも面白いことに、ゴリラもチンパンジーも相手が食物をとる前に分配を要求することはない。優位者が食物を手にしてから、相手の顔を見つめ、手を伸ばして分配を乞うのである。これは、その食物が食べたいというだけでなく、「他ならぬあなたの食物がほしい」と要求していることを示唆している。つまり食物は相手と自分との親和的なきずなを確認する手段となっているのだ。そして渡される食物には、その所有者の顔があたかも刻印されるかのように影響力が付与される。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

おそらく渡すものはその効果を知っている。肉食をするチンパンジーが最もよく分配をせがむのは群れの中で最優位のオスであり、オスは自分の同盟者や交尾相手によく肉を分配する傾向があるからだ。チンパンジーにとって食物の分配はある程度他者を操作する手段になっていると考えることができる。

人間の分配や共食もこの類人猿の分配行動から由来したものだと思う。ただ、人間では他者を操作する力が極力弱められている点が違う。アフリカの狩猟採集民は狩猟の後、誰（だれ）が獲物を仕留めたかわからないように分配し、最終的にキャンプの仲間全員に平等に肉が行き渡るようにする。これは個人の所有を徹底的に排し、権威が生じたり、仲間の間に差異が際立ったりしないように配慮するからだ。おそらく彼らは、食物を所有し、それを特定の相手に分配することが、ともに生きる仲間との平和を乱すことをよく知っているのだろう。

[B]<u>類人猿と違って人間は、食物に自分の顔が刻印されることを避けて共存を果たしている</u>のである。人間の社会ではどこに行っても、食物は自分のものであって自分のものでないという不思議な性質を持っている。せっかく丹精込めてつくった食材や料理でも、客が来れば惜しげもなく与えるのが礼儀である。食物を与えても相手にあからさまな見返りを要求しないし、初めから何かを交換条件にして食事を供したりはしない。食事は供する側と受ける側のどちらにとっても対等な許容の表現であり、相手に対して心を開くという互いの信頼によって成り立っている。

おそらく人間が食事という行為を創造するためには、「食は個体の間に緊張ではなく和をもたらす」という他の霊長類とはさかさまの発想が必要だった。その結果、サルにも類人猿にもできなかった不思議な宥和（ゆうわ）のひとときを可能にしたのだが、[C]<u>社会的な食事はまだ人間にとっても生得的な行動とはなっていない</u>。人間の採食行動は霊長類の祖先の特徴を色濃く反映しているからである。毎日何度も食事をとり、どこでも排泄（はいせつ）しようとするのは、熱帯林で果実を食べ、その種子を散布する役割を果たしてきた霊長類の特徴を受け継いでいる。幼児に排便のしつけをするのが難しいように、食べ物を仲間と分け合って食べることを学ぶには時間がかかる。人間の幼児は早くから食物を用いてコミュニケーションをとろうとするが、その適切な方法を知っているわけではない。その技法は社会的な場で何度も経験をつみながら鍛えていかねばならないのである。

（山極寿一「食というコミュニケーション」）

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問１　傍線の箇所Ａ「物騒な代物」とあるが、何がどのような意味で「物騒」なのか。二十五字以内で説明せよ。

問２　傍線の箇所Ｂ「類人猿と違って人間は、食物に自分の顔が刻印されることを避けて共存を果たしている」とあるが、類人猿と人間の「共存」のしかたの違いを対比して八十字以内で説明せよ。

問３　傍線の箇所Ｃ「社会的な食事はまだ人間にとっても生得的な行動とはなっていない」とはどういう意味か。本文の内容に即して五十字以内で説明せよ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第十六講　知識モノ解説

語句

生得的＝せいとくてき→生まれ持っての・先験的・先天的（ラテン語のア・プリオリ）
　対義語　経験的・後天的（ラテン語のア・ポステリオリ）
宥和＝ゆうわ→大目に見る・寛大に対応　cf融和→打ち解ける
霊長類＝れいちょうるい→サル類とヒト類を含む動物の中で最も進化した哺乳類霊長目の総称
類人猿＝るいじんえん→霊長類のなかでも人間に最も近いもの　チンパンジー、オランウータン、ゴリラなど

Ⓒ RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第十六講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）職場のドウリョウと食事する　①亮　②僚　③寮　④療　⑤瞭

（イ）人生のハンリョと出会う　①飯　②半　③伴　④汎　⑤判

（ウ）壊れた関係をシュウフク　①修　②集　③繍　④収　⑤拾

（エ）ヒンパンに街で出会う　①品　②賓　③牝　④貧　⑤頻

（オ）誰にもジャマされない　①間　②摩　③魔　④痲　⑤麻

（カ）相手とシンワ的なきずなを作る　①神　②心　③真　④親　⑤深

（キ）森へシュリョウに出かける　①種　②主　③取　④守　⑤狩

（ク）種子を広範囲にサンプする　①参　②散　③産　④賛　⑤惨

（ケ）動物のサイショク行動を観察　①祭　②際　③菜　④採　⑤栽

（コ）タンセイ込めて料理する　①丹　②端　③嘆　④単　⑤短

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第十六講　コミュニケーション論

《本文の対比構造》

主役

人間の食＝コミュニケーションとしての食＝他者との親密な関係を結ぶため／後天的経験的に学ぶ

主な対比

比較相手その１

霊長類＝サル＝食物は争いのもと・優劣の関係を反映

小さな対比

比較相手その２

類人猿＝ゴリラ・チンパンジー＝食物の個人所有・食物を分配するときは権威者の影響力を示す

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

《解説》

問１《傍線部説明・記述》

「そんな物騒な代物」とは前段落の「霊長類（サル）」の生態を踏まえての表現です。設問の「何が」にあたるのは、もちろん「食物」ですね。では、「どのような意味で」かを、**具体例はカット・対比の表現・繰り返されている表現は大事**という三原則にもとづいて解答を作ります。得点になるポイントを挙げます。順番は問いません。自分の答案に次に挙げる語句が入っていれば加点してください。第一ポイント「食物」「食」、第二ポイント「親密さではなく」あるいは「他者と分かち合うより」、第三ポイント「争いのもと（源泉）」、第四ポイント「優劣の関係」、以上です。

問２《傍線部説明・記述》

先の霊長類にくらべ、より人間に近い「類人猿（ゴリラ・チンパンジー）」と「人間」との対比です。記述の三原則というフィルターを通すと、キーワードが浮かび上がるはずです。それが得点になる箇所です。類人猿側の第一ポイントは「食物の個人所有」、第二ポイント「権威」、第三ポイント「差異」、第四ポイント「緊張」です。順番は問いません。人間側の第一ポイントは「個人所有を排する」、第二ポイントは「対等」、第三ポイントは「信頼」、第四ポイントは「宥和」「和」です。こちらも順番は問いません。合計八つのポイントを挙げましたが、五つ以上なら上出来です。

問３《傍線部説明・記述》

「社会的な食事」とは、タイトルにもあるコミュニケーションとしての食事のこと、他者と宥和的に分け合う、分かち合う食事のことです。「生得的」ではないとは、生まれ持っての本能ではないということです。まだ霊長類レベルの特徴を残しているためで、つまり経験的に学習していくしかないということ。得点になる第一ポイントは「霊長類の採食行動を反映」「霊長類の名残を残している」、第二ポイント「食物によるコミュニケーション」「食べ物を分け合う」、第三ポイント「方法」「やり方」、第四ポイント「経験」あるいは「時間をかけて」、第五ポイント「学ぶ」「学習する」、です。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

模範解答

問１　食物が親密さより争いや優劣関係の源泉という意味。（二十四字）

問２　類人猿が、食物の個人所有を通して権威や仲間内の差異といった緊張下で共存をするのに対し、人間は、食物の個人所有を排し、対等な互いの信頼といった宥和的な共存をする。（八十字）

問３　霊長類の採食行動を反映し、食物によるコミュニケーションの適切な方法は、経験から学ぶ必要があること。（四十九字）

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題解答　第十六講

（ア）②
（イ）③
（ウ）①
（エ）⑤
（オ）③
（カ）④
（キ）⑤
（ク）②
（ケ）④
（コ）①

解答漢字一覧

（ア）同僚
（イ）伴侶
（ウ）修復
（エ）頻繁
（オ）邪魔
（カ）親和
（キ）狩猟
（ク）散布
（ケ）採食
（コ）丹精

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。